

# 再生

第二章 閉じられた<sup>むげん</sup>∞



## 一 カプセルの海

金曜日ひとときの一時の秘密の場所はシャッターが半分下りていた。中にまだ2、3人いるようだ。店の外に出てきた顔見知りの店員が僕を見て

「いいすよ、一杯ぐらいなら」と言った。中に二人いた。連れではない。一人は泥酔していた。一人は空のコップを両手で握りボーとしていた。僕はウイスキーを頼んだ。出来るだけ速く酔いたかった。携帯電話が震えた。

「海へ カプセルホテル「海」 地下鉄××西出口 歩いて5分 一泊2500円」

大量に撒かれるメール。その中のいくつかは、この時間都会を漂流している者に届くのだろうか。

「〇〇さん、閉店だよ」

店員が、泥酔者の肩を揺すった。

「ここはどこだ」

男は言った。

「家は近いの？」

ボーとしていた男が言った。

「知らないすよ」

「だって名前を言った」

「誰だっていいすよ、適当で」

「名前なんて、まぎれてしまえばみんな一緒

だなあ」

ボーとしていた男が言った。

カプセルの中で体をくの字に曲げた。

僕は海の中にいた。無限の海。微かに風の音が聞こえる。目を閉じてても海は消えなかった。やがて打ち寄せる波の音が聞こえた。カプセルの中の海は、限りなく深く、限りなく広がっていた。僕は無限に体をゆだねた。僕を遮る物は何もない。

カプセルに封じ込まれた海。∞。